

真宗大谷派 存明寺通信

No.182

2018年（仏暦2549年）1月1日発行



ぞんみょうじ 存明寺HP、随時更新中 しんらん であ 親鸞と出会うお寺

<http://www.zonmyoji.jp>



岩も根もあつと
たださらさらと水は流るる

（甲斐和理子）

【甲斐和理子】京都女子大学の創始者、教育者。浄土真宗の住職であり、学者である父の影響を受けて育つ。

年末、やらなければならぬ仕事如山積し、思い通りにならない現実もあって、しんどい日々を過ごしていた。その時にふと、あの言葉が思い浮かんだ。

岩もあり、木の根もあれど さらさらとたださらさらと 水は流るる

（甲斐 和理子）

二十年以上も前に、真宗教団連合が発行したカレンダーに書いてあった言葉だ。語呂がいいので、暗記していた。

人として生きていけば、岩や木の根のような、越えがたいと思える現実と直面することもある。そんな時、なんとかして岩や木の根をどけてからすっきりとしたいと思うのが、私たち人間の、日ごろの心なのではないだろうか。

しかし、浄土真宗の世界は違う。岩や木の根のような、行く手を阻む壁や溝を、たださらさらと超えていく水のごとくに生きていく世界のあることを、ひたすらに教え続けている世界が浄土真宗という世界だ。

今年も一年、そのような世界を、人々とともに明らかにしながら、歩んでいきたい。

二〇一八年一月一日

真宗大谷派 存明寺

住職 酒井義一

児童教化のページ 498・499

真宗大谷派の月刊誌である『真宗』（東本願寺出版）の2017年11月号と12月号に執筆した文章を掲載します。テーマは『真宗大谷派における児童教化』。真宗においてなぜ児童教化が大切なのかを書かせていただきました。（存明寺住職）

大切にしたいこと（上）

—真宗大谷派における青少年教化のいのち—

東京教区存明寺 酒井 義一

真宗大谷派の青少年教化に関わる者として、大切にしたいことを確かめていきたいと思う。

小さな求道者とともに歩む

まだ二十代だったころ、大谷派の児童教化の研修会に参加した。その時のテーマが「小さな求道者とともに歩む」という言葉だった。以来、三十年以上たった今でも、忘れることのできない言葉となった。

ここでいう「小さな」とは、いうまでもなく「体の小さな」という意味であるが、さらに言葉を重ねれば、「保護が必要な」とか「社会的な弱者」という意味が込められていると受け止めている。

ともかく、子どもが求道者。そんなことはそれまで考えてもみなかったこと。だからとても新鮮

に響いた。そして、今もなお新鮮に響いている。

子どもが求道者。今までの子どもたちとの出会いの中で思い当たることがたくさんある。

ある時のこども会で、私のところに座った男の子は「お父さんがいなくなった」と打ち明けてくれた。両親が離婚し、母との二人だ



3月恒例のケンタッキーランチパーティー

けの生活が始まったことへの戸惑いを語ってくれたのだった。もちろん私は何もすることができない。しかし、この男の子が、大切な人と暮らせない悲しみを抱えながら、今を懸命に生きようとしていた求道者のように感じた。子どもは自分の思いをたくさん言葉を使って表現することはあまりしない。だから、サインを見落としてしまうこともあるだろう。しかし、人間として生まれた以上は、子どもも思い通りにならない現実に出会うだろうし、苦しいことや悲しいことにも出会ってしまう存在なのだ。

菩薩とは特別な人のことではないのでしよう。「道を求める人」のことであり、「道を求めずにはおれない心を胸底深くに持っている者」のことです。菩薩というのは、あなたたち一人ひとりのことなのです。

（黒田 進氏
教師修練講義、二〇一〇年）

まさに人間として生を受けた子どもたち一人ひとりが、実は道を求めずにはいられない心を持った「菩薩」であり、「求道者」なのだ。

真宗大谷派における青少年教化ののちは、ここにある。目の前の子どもをひとりの求道者として見いだしていくこと。それが青少年教化活動の見失ってはならない大切なのちなのではないだろうか。

ひとりと出会う

自坊の子ども会（一九九二年開設）は、当初春・夏・冬の休みごとの開催で、段ボールの手作りや草木染め・流しソーメンなどのイベントが一日がかりで行なわれていた。案内にも力を入れ、多い時には参加者が百人を超えることもあった。当時の私は百人の子どもたちが集まることを誇っていたように思う。しかし、それは子どもたちのことを自分を誇るための「飾り」^{かざり}にしてしまうことにつながる、と今では思う。



お寺の池でザリガニつり

一方子ども会では、常に新しいイベントを考えなければならず、こどもの名前も覚えられない。「一体何のためにやっているのか？」という疑問が湧き、意欲もなくなり、二〇〇〇年夏を最後に、子ども会は自然消滅した。子どもたちに背を向けてしまった・・・。そんな感覚が消えずに残った。その後、ご縁があつて青少年センター準備室で「ひとりからはじめる子ども会」開設の手引き書の編集に携わることとなった。「子どもが少ない」「法務が忙しい」という教勢調査の意見を受け

て、子ども会開設のコンセプトを「ひとりと出会う」「ひとりから始める」とした。

それは、大がかりな子ども会を目指すのではなく、私ひとりから始められることを大切にすること。たくさん子どもたちを集めるのが目的ではなく、来てくれるひとりの子どもと出会うことを大切にすること。そんな願いを確認しながらの編集作業だった、

以来、このテキストを参考にした再挑戦が始まり、二〇〇四年春、自坊に新しい子ども会が誕生した。スタッフは妻と私のふたり。二〇名限定のメンバー制で、月一回二時間の子ども会である。

一人ひとりの名前を呼びあい、友だちのような関係を創ること。を何よりも大切にした動きである。正信偈のお勤めをしたあとに、毎月の催しと一緒に楽しむが、催しがメインではなく、それを通して子どもたち一人ひとりとふれあうことをメインにしている。

みだ
彌陀の五劫思惟の願をよく
よく案ずれば、ひとえに親鸞
一人がためなりけり
（親鸞 歎異抄六四〇ページ）

彌陀の本願とは、すべてのものをかならず救うという誓い。しかし、その誓いを受け取る側からいえば、それはほかならぬ私ひとりこそ救う本願だったというのである。私ひとりの救いが万人の救いに通じていく。ひとりということを大切に世界を生きたい親鸞がここにいる。

数が大事なのではない。そこにやってくるひとりの子どもとだけ出会えるのか。そしてそのような出会いを何通り創つていけるのか。そのような課題がもれなく与えられるということは、青少年教化に関わる者にとっての大きな醍醐味である。

（次のページへつづく）

大切にしたいこと（下）

— 仏法に出遇わずに 人生を終えてはいけない —

東京教区存明寺 酒井 義一

憧れた人たちの出会い

三十代の頃、真宗大谷派の全国青年研修会のスタッフを十年ほど務めた。その研修会の専任講師が祖父江文宏さん（一九四〇～二〇〇二）だった。

祖父江さんは、養護施設・暁学園の園長として五十人の子どもたちと生活を共にしていた。親の勝手な都合により一緒に暮らすことを奪われた子どもたち。祖父江さんは、悲しみや苦しみをいだく子どもたちの声をきちんと聞いていた人だ。そして、親鸞聖人の精神に裏打ちされた自らの言葉を子どもたちに届けていった人だ。その姿が実にまぶしかった。私が憧れた人。次の言葉はその人が遺した言葉である。

目の前の人の苦しみに 身を添わせることしか 自分が仏に出会う道はない
（祖父江文宏 『悲しみに身を添わせて』東本願寺出版）

世の中に満ちている矛盾や苦悩に真向かいになりながら、仏との出会いを願求し続けた先達がいた。その方の存在が、今も私を揺さぶり続けている。私もあの人のように生きていきたい、と。

共に居場所を創る

たとえどんなに時代が変わっても、子どもたちは自分の居場所を求め続けている、とても真剣に・・・それに応えるにはお寺が子どもたちにとっての居場所になればいい。

家庭でも学校でもない第三の居場所、「THE Third place」。そこは、家庭のように「早くしなさい」「勉強しなさい」などの言葉は飛び交わない。「しつけ」もあまりしない。学校のように「教育」や「勉強」や「宿題」を第一とはしない。

そこは、一人ひとりの子どもたちにとっての大切な居場所。その存在を丸ごと受け止め、寄り添ってくれる人のいるところ。

そのような場所としての子ども会を、お寺に住む者と、何よりもやってくる子どもたちと共に



お寺の本堂で正信偈の唱和

創っていくこと。それは共創、または共同教化ということだろう。共に居場所を創ることを大切にしていきたいものである。

終わりにき歩みをともし

大谷大学児童教化研究会に伝承されている言葉に次のような言葉がある。

いつまでも純真なれ
いつまでも未熟なれ
いつまでも持続せよ

いつまでも純真なれ—身は不純なので、いつでも願いを忘れ、場を汚してしまうのが私たちであるが、いつまでも純真なる願いに立ち返り続けよ、という呼びかけとして聞こえてくる。

あえて未熟であり続けよ—自らに未熟という自覚があれば、人は人が、さぐる、求める。そして、歩む。完成されてしまえば、人は人に教えたがる。そこには欺瞞があり、硬直があり、うさん臭さが漂う。未熟さの自覚こそが

歩みの原動力となるのではないだろうか。

持続せよ―繰り返し、繰り返し行なうということ、それは、人に出会い続けるということでもあり、見失ってしまった願いに立ち返り続けるということでもある。子どもとともに歩む自分になり続けるということでもあるだろう。

歩みには終わりが無いということだけが、自分の歩みが始まった確かな証拠となる。

子どもとともに歩む私へ

真宗大谷派における青少年教化の目的とは、お寺に子どもたちの居場所としての子ども会を開設することにある。しかし、それが最終目的ではない。子ども会ができたことをもって、完成だとはいえない。

青少年教化の真の目的は、子どもとともに歩んでいける人間になつていくことにあるのだろう。子どもの声を聞き、子どもとともに考え、子どもとともに歩ん



真夏のお寺でバーベキュー

でいける私になること、それこそが私たちが目指すべき真の目的なのだと思っ止めている。

仏法に出遇わずに

人生を終えてはいけない

真宗誌に毎回連載されているこの「児童教化のページ」の第一号には次のような言葉が掲載されている。

比丘等よ、(中略) 浄潔なる法を説け、又淨行を明かにせよ。汚れ少き生をうけたる衆生もあらん、彼等法を聞かず

ば終に滅亡せん。彼等は法を知る者とならざるべからず。(児童と宗教』第一巻第一号)

(現代語訳)

あなたよ、あなたにまで伝わった浄らかな教えを自らの言葉で表現せよ。真実に拠って生きよ。汚れ少ない生をうけた衆生がいる。彼等が、もしも法を聞くことがなければ、将来の繁栄はなく、滅んでしまうことだろう。彼等は仏法に出遇わなければならぬ。仏法に出遇わずに人生を終えてはいけない。

汚れ少ない生を受けた衆生とは、青少年のことである。「人として誕生した青少年たちよ。仏法に出遇わなければならぬ。仏法に出遇わずに人生を終えてはいけない。」それは真剣な叫び声である。

やがて二〇二三年には、宗祖親鸞聖人御誕生八五十年・立教開宗八百年慶讃法要が勤まる。こ

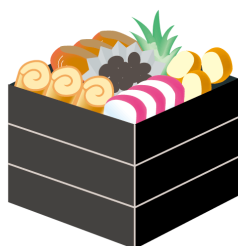
の法要は、青少年教化が大きなテーマとなることであろう。

慶讃法要を莊嚴しょうごんするために青少年が動員されるのではなく、青少年一人ひとりの存在を莊嚴するような慶讃法要をお勤めしていききたいものだ。

そのためには「仏法に出遇わずに人生を終えてはいけない」という願いを、あらゆる人々とともに、目に見える具体的な形にしておくことが、今を生きる私たちの使命なのではないだろうか。

慶讃法要をそのような動きの確認点に、そして、そのような動きの出発点にしていきたく願う。

(おわり)



2018年(平成30年)お寺のひろば

1月1日(月) 10時 修正会

3月10日(土) 14時 樹心の会

3月21日(水) 11時と13時 春のお彼岸法要

3月24日(土) 14時 グリーフケアのつどい

4月7日(土) 14時 樹心の会

4月28日(土) 10時 おみがきのつどい

5月3日(木) 12時 永代経法要

5月12日(土) 14時 樹心の会

6月9日(土) 14時 樹心の会

6月23日(土) 14時 グリーフケアのつどい

7月7日(土) 11時 新盆法要

7月14日(土) 11時と13時 お盆法要

8月25日(土) 午後 青年のつどい

9月8日(土) 14時 樹心の会

9月23日(日) 11時と13時 秋のお彼岸法要

9月29日(土) 14時 グリーフケアのつどい

10月13日(土) 14時 樹心の会

10月27日(土) 10時 おみがきのつどい

11月2日(金) 14時 報恩講のゆうべ

11月3日(土) 12時 報恩講法要

11月17日(土) 14時 樹心の会

11月下旬(予定) 真宗本廟報恩講奉仕団

12月8日(土) 14時 樹心の会

12月15日(土) 14時 グリーフケアのつどい

◎ぞんみょうじこども会 月一回

◎ぞんみょうじこども食堂 月一回

◎子育てサロンいちごのへや 月一回

お寺の掲示板 (1月のことば)

生涯を尽くしても
 であ
 出遇わねばならない
 ただひとりの人がいる
 それは
 私自身

廣瀬 杲



あとがき

▼新しい年がやってきました。今年こそはこれをした、あれをしたなどの願いをかける時でもあります。

▼人間がかかる願ひもありますが、人間にかけられている願ひもあります。そのことを明らかにするのが浄土真宗です。

▼人間にかけられている願ひとは、この一年、たとえどのようなことが起きようとも、そのことから何かを学んでいけるような者となつてほしい、ということではないでしょうか。それは人間にかけられている、深くて広くて尊い願ひです。

▼そんな願ひを見失わないように、この一年をていねいに生きていきたいものです。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

(住職・釋諦信)

東京都世田谷区北烏山4-15-1

真宗大谷派 存明寺

住職 酒井 義一

〒157-0061 TEL 03-3300-5057

FAX 03-3300-5880

E-mail : sakai@zomyoji.jp